

研究奨励交付金（若手奨励研究） 報 告 書

令和4年度採択分
令和5年5月31日作成

研究課題名（和文） 保育者養成における造形表現活動に関するプレゼンテーション能力育成
－地域連携活動を通じた学生の学びに着目して－

研究課題名（英文） Cultivating presentation skills related to art expression activities in
nursery teacher training course –Focusing on student learning throu
gh community collaboration activities－

研究代表者

氏 名 櫻井 晋伍
福岡県立大学 人間社会学部・講師

研究組織

氏 名	所属研究機関・部局・職	役割分担（研究実施計画に対する分担事項）
櫻井 晋伍	人間社会学部・講師	企画立案、教育実践及び報告書作成
木村 美佐子	社会福祉法人みのり保育会 徳成寺みのり保育園・園長	本教育実践に関する助言・協力

研究奨励交付金（配分額）

200,000円

研究成果の概要

本教育実践では学生に対して、田川市内の私立保育所・公立幼稚園からの要望を踏まえた壁面製作と、その活動における一連の取り組みを写真で時系列に記録し、パワーポイントを用いてプレゼンテーションを行うことを求めた。

その結果、学生は撮影におけるアングルのバリエーションの必要性と、写真撮影の量、園舎内で影が映り込みやすい箇所は装飾や撮影には不向きであるという実践的な省察を得ていた。

まず、アングルのバリエーションについては、造形表現活動において製作プロセスを撮影することで、色彩・形・大小関係等の造形的要素のうち、どの部分に注力して製作をしていたか第三者に伝えやすくなるという気付きを得ていた。また、写真撮影の量については、2度のプレゼンテーションの実践を通して、最終的な発表資料の作成において取捨選択できるような写真の量が必要という学びを得ていた。そして、園舎内の光については、部屋の角付近には影が写り込みやすいという気付きを共有していた。目視ではさほど気にならないものの、撮影をすると明暗の差が出やすい箇所であるため、このような明暗の写り込みに対する学びは、将来保育者として写真撮影を行う際にも生かすことが出来る知見であると考えられる。

研究分野／キーワード

造形教育、プレゼンテーション、写真撮影、壁面装飾

1. 研究背景

保育所・幼稚園のホームページやSNSでは、子どもの園生活での様子を写真や動画で配信しており、仕事の都合等で来園できずにいる保護者等にとっては、日頃の活動の様子を知ることができる貴重な情報源となっている。また、保育に関する研修会等においても保育者が撮影した写真や動画は、発表用資料として活用されることがある。しかし、その撮影の多くは保育者自身の感覚や経験に頼っている場合が多いのが実情である。将来、保育者として情報発信を行う立場となった際には、資料として活用できるような撮影の技術と、その画像処理に関する力量が求められるため、養成課程在学時に保育者に求められる写真撮影の技能育成と、写真を有効活用したプレゼンテーションの実践力育成を図る取り組みを行っておくことが望まれる。

保育現場に飾られている子どもの造形作品は多岐にわたっており、絵画のような平面作品もあれば、吊り下げるタイプのモビールのような空間を利用した立体的な作品等もある。そのため、保育者が子どもの作品製作過程や展示作品を撮影する場合には、様々な構図のバリエーションやアングルに関する理解が必要である。また、ホームページやプレゼンテーション等で用いる造形表現活動の資料を作成するには、必要に応じて画像のトリミングを行うことや、色調補正等の編集を施す必要が生じることもあるため、これらの技能についても習得しておくことが望ましいと言える。

そこで本研究では、田川市内の私立保育所と公立幼稚園の2か所の協力を得て、両園の園舎内にある広い壁面を装飾するための作品を製作し、学生たちが完成作品を両園内の壁面に装飾する作業を行わせた。その実践の中で、製作活動の構想段階から完成に至るまでの一連の過程をスマートフォンやデジタルカメラで撮影させ、作品の装飾後には、それらの写真を用いて実践の成果をプレゼンテーションすることにも取り組ませた。

2. 研究目的

大学生による機器の活用やプレゼンテーションスキルの育成に関する先行研究を概観したところ、内田（2021）は、教職課程学生のICT活用指導力の現状を把握するため、教職課程の4年次生を対象に調査を行った結果、2017年に実施された中学・高校教員を対象とした調査結果よりもICT活用の指導力に肯定的な回答をした割合は学生の方が高かったことを報告している。また、橘野ら（2023）は、日本の美術大学生を対象とした英語での効果的な作品プレゼンテーションの方法を検討しており、英単語リストを作成すると共にプレゼンテーションのモデルを提案している。さらに、プレゼンテーションに必要な色調等の編集に関する先行研究としては、榎ら（2023）は、パワーポイント等のプレゼンテーションスライド作成ソフトにおけるカラーパレットには色の偏りがあるため、カラーパレットの色数や使いやすさが向上するように新カラーパレットを作成したことを報告している。

このように、教職課程在学学生を対象とした調査報告や、大学生のプレゼンテーション能力育成を意図した実践研究等は行われてきているものの、保育者養成課程を対象として造形的な観点からのプレゼンテーション能力を育成することを意図した実践研究は管見の限り見つからなかった。

そこで、本研究においては、保育者養成課程在学学生の写真の撮影における技能習得と、プレゼンテーション能力の育成を意図した教育実践に取り組むことで、その教育的意義を明確化することを目的とする。

3. 研究方法

3-1. 対象

令和4年度後期、2年次生対象開講科目「保育内容の指導法・表現A」の履修者13名。

3-2. 実施期間

T保育所における実践は、令和4年10月に計6回の授業時間を用いた。また、T幼稚園での実践は11月下旬から12月下旬にかけて計5回の授業で実施した。

3-3. 授業内容

1回目の授業ではT保育所へ出向き、未満児と以上児の保育室内の壁面や、園内の通路に隣接したガラス窓等の展示スペースのサイズを計測させた。そして、2回目の授業では、筆者が作成したパワーポイントを用いて、保育者に求められる写真撮影の技能に関する講義を行うと共に、実践前段階における各自の構図・アングルや光などに関する課題意識についてのレポート提出を求めた。その後、展示スペースごとに3~4人を割り当て、作品製作を行わせた。製作時には、安易に既成のイメージを流用せずに、オリジナリティを重視して製作するよう指導した。3~4回目の授業では、サイズの具合を確認させながら作品製作と写真撮影に取り組ませた。5回目の授業時には、学生全員でT保育所に作品を搬入して装飾を行った後、現場で完成作品の写真撮影を行った。授業の事後学修として、グループごとに製作及び写真撮影の省察に関するパワーポイントを作成させたいうえて、6回目の授業時に発表を行わせた。その後、実践後のレポート記述に取り組ませ、授業時間中に回収した。

T幼稚園における実践では、授業時間外に代表者3名で現地に出向き、展示スペースのサイズを計測させるとともに、写真で記録を行わせた。そして、授業時にはT幼稚園の展示スペースの場所やサイズを共有し、作品製作に取り組ませた。この実践では、3・4・5歳児の教室の後方にある掲示板に飾る壁面製作に取り組ませた。各教室の間取りは共通しており、壁面のサイズもほぼ同じ大きさであった。前回の作品同様、3コマかけてグループでの作品製作と写真撮影に取り組ませた。完成後は、T幼稚園に作品を持参し、学生たちに装飾と写真撮影を行わせた。最後の授業時には、T幼稚園で撮影した写真を基にパワーポイントを用いた発表を行わせ、省察レポートの記述を求めた。

3-4. 検討内容

2回にわたる作品製作及び写真撮影、パワーポイントを用いた発表を踏まえ、特に造形表現活動における記録技能の向上を意図して、カメラのアングル、光の取扱い、色彩の調整等に関する学生の課題を探る。学生が記述した事前事後のレポート内容を比較考察することで、学生自身の気づきの変化を捉え、本教育実践の成果を明らかにする。

それにより、保育者養成課程の造形関連科目において写真撮影の指導を行う教育的意義を明確にする。

3-5. 倫理的配慮

本研究の実施にあたっては、学生に対して研究の目的を説明した。具体的には、データは研究の目的以外には使用しないこと、データの管理は研究代表者が責任をもって行うこと、研究に協力することによる不利益は生じないことを伝えた。

また、研究への協力の有無によって成績評定に影響が無いことを学生に明示するために、科目の成績評定開示後の令和5年4月に、研究協力同意書及び同意撤回書を提示し、本研究への協力を依頼した。その際には、研究代表者が学生に対して直接依頼を行うのではなく、本研究に携わっていない本学専任教員が依頼することによって、学生の自由意思による研究協力となるように配慮し、同意を得た学生のデータのみ用いて本報告書の執筆を行った。

4. 実践結果

T保育所には、「ハッピーハロウィン」（1階保育室に掲示）、「おかしな木」（2階廊下窓に掲示）、「どでかぼちゃ」（3歳以上児の保育室に掲示）の3作品を装飾した。T幼稚園には、「十二支と船」（3歳児の教室）、「うさぎのもちつき」（4歳児の教室）、「どでかがみもち」（5歳児の教

室)の3作品を展示した。

本実践では、作品の製作開始時から保育現場に完成作品を装飾するまでの一連の取り組みを写真で記録することに加え、作品完成後には、写真を基にパワーポイントを作成し、製作過程におけるグループ独自の取り組みについてのプレゼンテーションを行わせた。特に今回は、記録した写真の効果的な活用に着目した造形表現活動の実践であることを踏まえ、写真撮影時における工夫と気づきや、パワーポイントに掲載する際に必要となった色調補正やトリミングに関する省察も発表内容に含むよう学生に伝えた。

本報告書では、紙面の都合上、上記の作品の中から「どでかぼちゃ」「おかしな木」「十二支と船」の3作品について、学生が撮影した写真を掲載する。そして、プレゼンテーション時に各グループが重視していた事項についての報告を行う。

4-1. どでかぼちゃ

4-1-1. 「どでかぼちゃ」の完成作品

「どでかぼちゃ」は、そのタイトルが示す通り、大きな橙色のかぼちゃを作品の中央に配置し、大きく切り取った口の中にはフランケンシュタインとミイラ男、魔女をあしらった作品である。保育室後方の広い掲示板のスペースを活かした作品に仕上げるために、背景にはカタカナを書いた旗や、黄や銀の星をあしらっていた。造形材料は、色画用紙と折り紙を用いていた。



写真1 「どでかぼちゃ」の完成作品の展示

4-1-2. 「どでかぼちゃ」のプレゼンテーション



写真2 配色を検討している段階

このグループのプレゼンテーションでは、配色に力点を置いた製作過程の報告がなされた。本報告書では紙面の都合上、写真は1枚のみ掲載した（写真2）。

このグループの発表の骨子は、以下のとおりである。

①ハロウィンを表現するための主たるモチーフとして選んだのは、フランケンシュタイン、ミイラ男や魔女である。これらのモチーフの配色については、色合いが異なる色画用紙を実際に並べ替えながら、慎重に検討を重ねた。

②この作品で最も広い面積を占めるのは、かぼちゃの橙色である。これに対する各パーツの色のコントラストは、作品の仕上がりに大きく影響すると考えられたため、パーツ間の配色の重複を極力避けながら選択した。

③紫とうす紫のように、同系色であっても濃淡を差し換えると、作品の印象が変わる。そのため、最終的に色を選択する際には、微妙な配色の違いにも着目し、比較検討しながら使用する色を選択した。

このグループのプレゼンテーションでは、作品を完成させるまでの一連の流れを振り返る中で、「配色の重要性」に着目して発表をまとめていた。学生の報告にもあるように、壁面製作で使用する色の組み合わせは、作品の完成度に大きく影響する。このグループの学生は、実際に色画用紙を並べかえながら配色を検討している記録画像をもとに、「配色」の重要性に着目したパワーポイント資料を作成していた。

4-2. おかしな木

4-2-1. 「おかしな木」の完成作品

「おかしな木」は通常の木とは異なり、幹には顔の表情を取り入れ、枝には渦状の曲線のフォルムを持たせており、各パーツの形に工夫を凝らした作品となっていた。木以外には、小さめのかぼちゃや蝋燭をあしらっており、背景には、大小のサイズの違いを付けた星やお化けを配置して、作品全体の構成をまとめていた。このように、メインとなる木の周辺に、比較的小ぶりの同種類のモチーフを近い位置に密集させて構成することで、装飾時に構成のまとまりが生まれるように工夫された作品である。造形材料は色画用紙、毛糸、綿、フェルトを用いていた。



写真3 「おかしな木」の完成作品の展示

4-2-2. 「おかしな木」のプレゼンテーション



写真4 造形材料の組み合わせを検討している段階

このグループのプレゼンテーションでは、製作過程を示しつつ、「造形材料の組み合わせ」に着目したプレゼンテーションがなされた。発表の骨子は、以下のとおりである。

①ハロウィンという行事を意識して、木の幹には大きな口をあしらい、枝の先端は渦状にすることで、お化けのようなモチーフにした。

②使用した素材は色画用紙に加え、綿や毛糸やフェルトといった素材も組み合わせた。

③作品の大半は平面だが、折り紙で立体的なものを製作するなど、部分的に立体感を持たせる工夫も行った。

このグループの写真には、他のグループにはない綿や毛糸といった素材を取り扱っている記録が多数残されていた。特に、作品製作時において、素材の違いを生かすための試行錯誤を行っている様子や、それぞれの素材の色の組み合わせを検討している場面が記録されていた。試行過程を振り返る際の資料としては、画像による記録が有用であったことから、本実践を通して、視覚的に捉えることが出来る記録の重要性に言及をしていた。

4-3. 十二支と船

4-3-1. 「十二支と船」の完成作品

「十二支と船」は、波の部分について計12枚の波模様の形を組み合わせで表現しており、十二支の数と合わせてあしらっていた。船の上の十二支のモチーフと波の数を一致させたことで、全体的な見栄えが噛み合うような工夫を施していたことが窺える作品である。また、波を製作する際に青1色では平坦な印象になってしまうため、青と水色の2色を交互にあしらうことで、色画用紙を用いた平面作品の中に立体感を表すような工夫をしていることが見て取れた。このグループの作品は、室内の掲示板全面を使用するため、各パーツのサイズに加え、作品全体のサイズも考慮する必要があった。製作時には、幾度となくメジャーで計測して確認している様子が見られた。その結果、展示した際には、室内の掲示板のサイズを有効活用したサイズで、スケール感のある作品として仕上がっていた。使用した材料は、色画用紙と折り紙であった。



写真5 「十二支と船」の完成作品の展示

4-3-2. 「十二支と船」のプレゼンテーション



写真6 メジャーを用いた計測の様子

作品製作前に幼稚園を訪問した際には、学生に展示する壁面のサイズを計測させた。「十二支と船」を製作したグループのプレゼンテーションでは、「パーツのサイズ」「作品全体のサイズ」といったサイズに着目したプレゼンテーションがなされた。発表の骨子は、次のとおりである。

①作品を展示する場所に応じた作品に仕上げるため、作品全体が計測してきた壁面のサイズになるように、メジャーを用いてサイズを確認しながら製作した。

②壁面に展示した際の個々のパーツのサイズに加え、それらを組み合わせた際の作品全体のサイズを入念に確認しながら製作に取り組んだ。

③兎年を祝う展示であることを意識し、十二支の先頭には兎を目立つように配置した。

このグループは、掲示板全体を使った作品に仕上げるため、特にサイズについて考慮して製作に取り組んでいた。プレゼンテーションにおいても、作品のサイズに留意して取り組んでいたことを強調して述べていた。また、製作時の写真には、メジャーを用いてパーツのサイズを確認する様子や、それらを並べた時のサイズを確認している様子を引用しながら報告していた。

以上のように、配色や形、造形材料の種類やサイズなど、グループ毎に留意した点についてプレゼンテーションを実施しており、それらの工夫が作品のオリジナリティーにも繋がっていたことが見て取れた。

4-4. 学生のレポート記述

レポートの記述は、T保育所とT幼稚園における実践の事前及び事後に実施した。授業時間中に20分程度で記述を求め、授業時間終了時に全員分を回収した。

4-4-1. T保育所における実践前後のレポート集計結果

T保育所における実践の事前・事後レポートの記述内容について、カテゴリー化して集計した結果を図1・図2に示す。

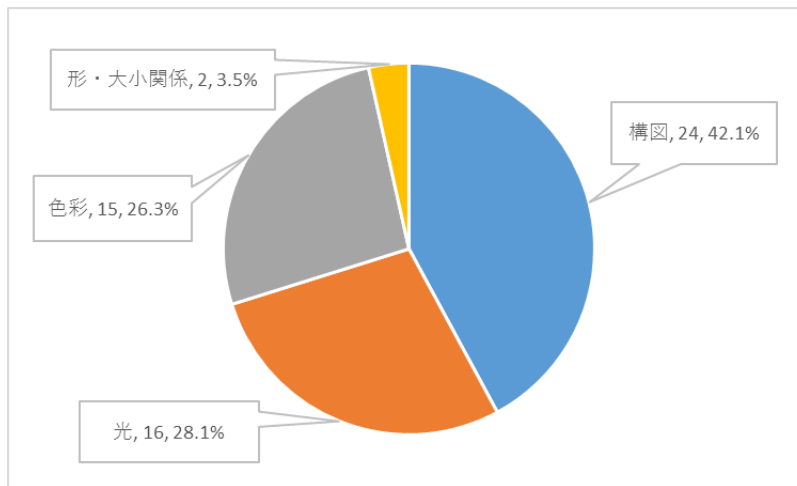


図1 T保育所における実践前のレポート集計結果

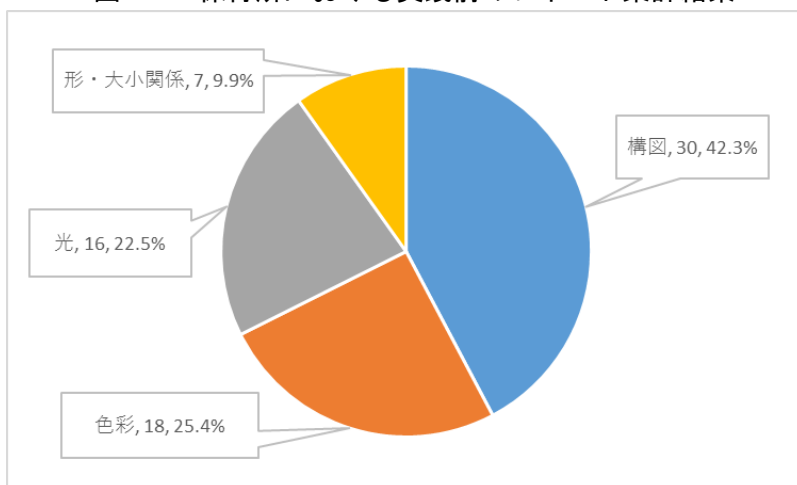


図2 T保育所における実践後のレポート集計結果

実践前の記述数は、「構図」24回（42.1%）、「光」16回（28.1%）、「色彩」15回（26.3%）、「形・大小関係」2回（3.5%）という結果であった。一方、実践後は「構図」30回（42.3%）、「色彩」18回（25.4%）、「光」16回（22.5%）、「形・大小関係」7回（9.9%）であった。

実践前後ともに「構図」に関する記述数が最も多かったことから、学生は特に「構図」に着目しながら記録を行っていたことが読み取れた。具体的には、「正面から撮った方が綺麗に見えるように感じた。」「作品の細かい部分まで分かりやすくなるように、部分をアップにして撮影をしていたが、装飾をする際は構成のバランスを見ながら、全体が見えてくるように撮影した。」等の記述が見られた。また、「子どもたちの目線に合わせて、下からのアングルで撮影した。」という記述も記されていた。子どもが展示作品を見た時の視点を意識した撮影記録も残しておくことは、保護者等に作品の見方のバリエーションを伝える際にも有効であると考えられる。

「形・大小関係」については最も記述数が少なかったが、「斜めに撮影して、立体的な形が強調されるようにした。」と記されており、立体的な表現が他者に伝わるように意識して撮影していた学生もいた。

撮影において重要な要素である「光」に関しては、製作前後共に16回の記述が見られた。ここでは、「フラッシュをたいた方が、色が鮮やかになった。」「フラッシュをたいた方が明るくなり、実際に目で見た時と同じように写すことが出来た。」という、フラッシュにより意図的に明るさを操作したことを記しているケースや、「自然光を入れて、影が入らないようにすることで綺麗な写

真を撮影することが出来た。」といった記述も見られた。これらの記述からは、学生は自然光と人工光の両方について意識しながら撮影に臨んでいたことが窺えた。それ以外にも、「光」に関連した記述としては、「壁の天井の角付近は暗くなるため、その部分にはあまり飾りを付けないほうが良いと思った。」という記述もあった。肉眼で天井の角を見ているだけでは気付きにくいですが、写真で撮ると確かに部屋の角は想定しているよりも薄暗く撮影されてしまう。この気付きは、実際に装飾と撮影を行ったことによって理解が深まった点であると考えられる。

以上のことから、製作過程及び装飾後の写真撮影に関する全体的な傾向としては、製作前後ともに、「構図」の取扱いの難しさについて留意していたことが読み取れた。その割合は製作前後共に約4割を占めていた。また、「光」の活用方法については、今回の実践を通して基礎的な学びを得ていたことが読み取れた。

4-4-2. T幼稚園における実践前後のレポート集計結果

次に、T幼稚園における実践の事前・事後レポートの記述内容について、カテゴリー化して集計した結果を図3・図4に示す。

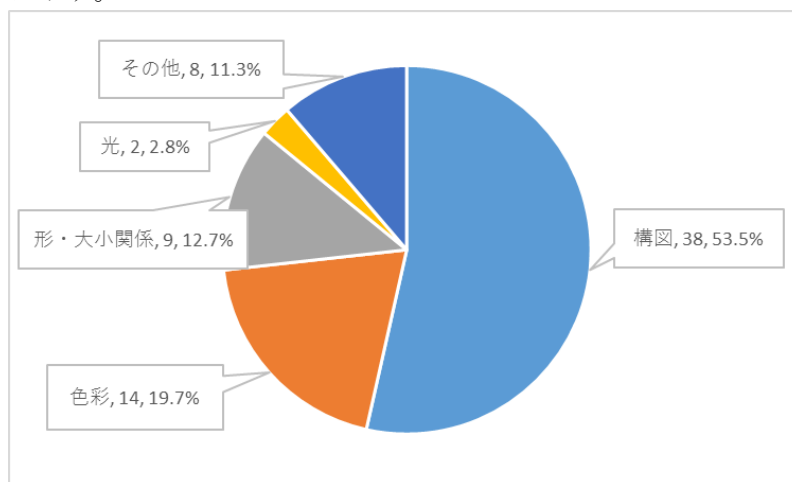


図3 T幼稚園における実践前のレポート集計結果

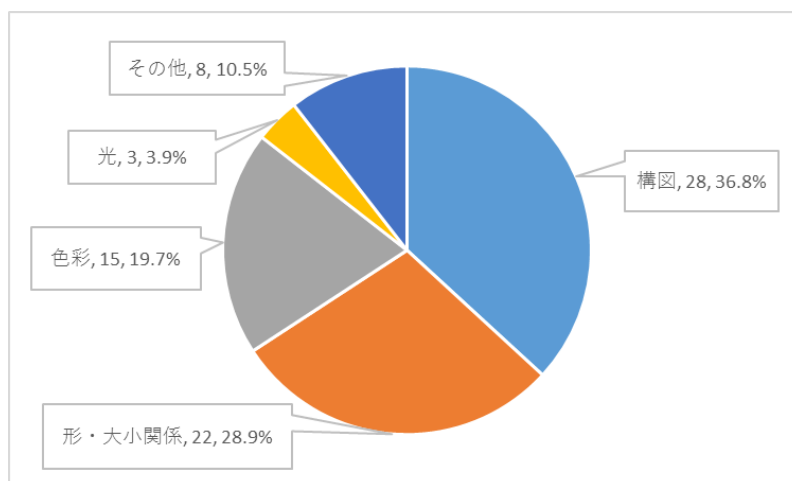


図4 T幼稚園における実践後のレポート集計結果

実践前の記述数は、「構図」38回（53.5%）、「色彩」14回（19.7%）、「形・大小関係」9回（12.7%）、「光」2回（2.8%）、「その他」8回（11.3%）という結果であった。一方、実践後は「構図」28回（36.8%）、「形・大小関係」22回（28.9%）、「色彩」15回（19.7%）、「光」3回（3.9%）、「その他」8回（10.5%）であった。

以上の結果から、T幼稚園の実践においても、学生は「構図」に関して最も留意して取り組んでい

たことが分かった。具体的には、「装飾の際に、装飾をしている人の背中で作品が見えなくなることがあるため、斜めから撮影した。」といった記述があり、学生は、装飾等の実践の様子が見て取れるような写真撮影に取り組んでいたことが分かった。この工夫については、子どもを対象とした写真撮影でも活用出来る視点と考えられる。また、「発表の際に注目してほしい部分が分かりやすくなるようにトリミングした。」「伝えたいところが大きく映るようにあえて周辺部分をトリミングすることにした。」といった記述からは、編集時に構図を調整することで、強調したい部分の印象が強くなるように工夫を施したことが分かった。

「その他」の記述には、「1回目のT保育所を対象とした実践では、製作中の写真が少なかったため、意識的に写真撮影を行った。」「前回の経験から写真を多く撮ることを意識したため、パワーポイントを作成する際の写真素材には困らずに取り組むことが出来た。」という省察が記されていた。ここからは、2度にわたる教育実践の結果として、写真量を充実させて、プレゼンテーション時に写真を取捨選択できるようにする必要性を学んでいたことが分かった。

5. 本教育実践の成果

本教育実践では、学生に対して、保育現場からの要望を踏まえた壁面製作と、その活動における一連の取り組みを時系列に集約し、パワーポイントを用いてプレゼンテーションを行うことを求めた。学生は実践を通して様々な気づきを得ていたが、本報告書では、プレゼンテーションにおいて特に学生が着目していた「撮影時のアングル」「写真の量」「光の取扱い」について報告をする。

まず、撮影時のアングルに関しては、正面からの撮影・左右や斜めからの撮影・下から作品を見上げる角度での撮影といったように、臨機応変にアングルを変えて撮影することの必要性を述べていた。例えば、完成作品を撮影する際には正面からの撮影に集中しがちだが、園内に展示した完成作品を子どもが見る場合は、作品を見上げるようなアングルもあるはずである。また、製作過程で意見交換を行っている場合等は、何について検討している場面なのか明確に示すために、アングルを工夫する必要が生じる。このように学生は、誰を対象として、何を、どのように伝えるのかといった内容を意識することによって、記録のバリエーションを生み出す必要性を学んでいた。撮影の意図に沿ってアングルを設定し、プレゼンテーションに活かすことは、保育者としても必要な技能であると考えられる。

次に、写真の量に関しては、プレゼンテーションの機会を設けたことによって撮影の量が必要になるという省察を得ていた。1回目のプレゼンテーションを踏まえ、いずれのグループも2回目のプレゼンテーションに向けた取り組みでは、製作過程と完成作品の写真の量が増加していた。発表内容に応じて取捨選択が出来る量の写真を十分に確保しておくことは、パワーポイントだけでなく、ホームページやSNSでの発信においても必要になる。ディスカッション時には、写真の選択肢を準備することの必要性が述べられていた。

光に関しては、目視と写真で明暗の差が生じることに対する気づきを得られていた。目視ではさほど気にならない場合であっても、写真の場合は写り込む影が目立ってしまうこともある。学生のプレゼンテーションでは、園舎内で写真撮影をする際には、壁の天井の角付近は影が写り込みやすいため、その付近への装飾は避けた方が良いという省察が紹介された。見栄えの良い写真の撮影を意図すると、このような光に関する実践上の気づきを学生間で共有出来たことは、本実践の成果と考えられる。作品の展示場所が園舎内であったことから、将来、保育者として展示作品の撮影を行う際には、本実践を通して得た気づきを学生が活用することが期待できる。

以上のことから本教育実践は、将来学生が保育者になった際に求められる情報発信の技能習得の機会として有用であったと考えられる。

謝辞

田川市内のT保育所及びT幼稚園のご協力により、作品展示の場を提供して頂いた。感謝申し上げます。

6. 主な発表論文等

2023年度にデータの分析・再評価を行い、美術教育の研究誌へ投稿をする予定である。

7. その他の研究費の獲得

特になし。

8. 参考文献等

- 1) 内田隆「教職課程学生のICT活用指導力の現状と課題ー中学高校理科教員免許取得希望学生の事例ー」日本科学教育学会研究会研究報告,第35巻第5号,pp.69-74,2021.
- 2) 橘野実子、大島武、鈴木万里、陶山恵、松中義大「英語による作品プレゼンテーションに関する指導プログラムの作成」東京工芸大学芸術学部紀要,第29号,pp.39-49,2023.
- 3) 槇究、鈴木智子、山村佳奈瑛「プレゼンテーションスライド作成用カラーパレットの提案ー作成されるスライド品質の向上は可能かー」実践女子大学生生活科学部紀要,第60号,pp.27-37,2023.
- 4) 北村雅則「プレゼンテーション学習における振り返りサイクルを確立するための実践的研究」南山大学紀要〈アカデミア〉人文・自然科学編,第21号,pp.213-225,2021.